

アイルランド出張報告  
—CHAGS13 への参加・発表—

京都大学大学院  
アジア・アフリカ地域研究研究科・教授  
高田 明

令和4年6月25日から7月2日にかけて、アイルランド共和国のダブリンにあるダブリン大学（写真1）を訪問し、同大学で開催された The 13th Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS13) に参加、研究発表を行うと共に、CHAGS13 の出席者とアフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築について意見交換を行った。報告者にとっては、Covid-19 で海外渡航が2年半以上の間ほぼストップしてからは初めての海外渡航となった。

CHAGS は1966年に米国のシカゴで第1回となる会議が行われて以来、数年ごとに開催されてきたもので今回が13回目の開催となる。狩猟採集社会を中心に扱う研究集会としては、もっともインテンシブなもので、人類学、地域研究、地理学、心理学、教育学、言語学など様々な分野の狩猟採集社会研究者が世界中から一堂に集って熱心な議論が行われる。

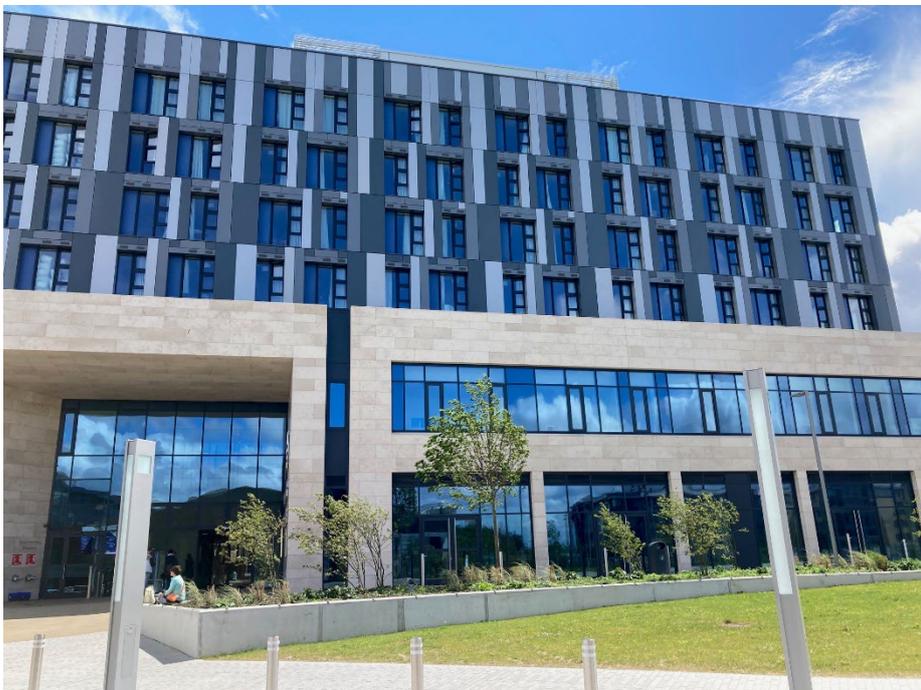


写真1 ダブリン大学のキャンパス。

報告者は、Four approaches to studying childrearing among hunter-gatherers というタイトルのパネルを組織した。このパネルは、(1)ミクロ発生的発達：特定の文脈における一瞬一瞬の個人の学習、(2)個体発生的発達：個人の生涯の時間枠組みで生じる、(3)文化－歴史的発達：記号や物質的技術、価値システム、活動のスクリプト、規範などを通して個人に遺産を継承する、(4)系統発生的発達：遺伝子を通して個人にその遺産を継承していく種の歴史、という4つのアプローチから総合的・包括的に子どもの発達をとらえるという研究枠組みを提示・推奨するもので、イントロダクションと以下の8つの発表からなる（括弧内は発表者）。

1. Four approaches to the analysis of gymnastic behaviors among the San of southern Africa (Akira Takada)
2. Everyday Classrooms (David F. Lancy)
3. The co-evolutionary history of birth as a hunter-gatherer cultural activity system: Evidence from the BaYaka (Adam H. Boyette, Senay Cebioğlu, and Daša Bomjaková)
4. Towards a broader understanding of childhood among the Yaghan: Tracing children's material culture and spaces in Hunter-Gatherer societies by means of Yaghan's ethnoarchaeology (Tierra del Fuego, South America) (Blanca Pierres Tejada, Ivan Briz i Godino, and Penny Spikins)
5. Childcare in hunter-gatherer societies: The meaning of alloparenting in which children are raised in groups (Taro Yamauchi)
6. Attachment Behavior of a Baka Infant and his Participation in Song and Dance (Ayana Tanaka)
7. Reconsidering the Question of "Do Hunter-gatherers Teach Children?" (Koji Sonoda)
8. Socialization among the Batek in Kelantan, Malaysia: An Aspect of Spatial Use of the Environment (Aya Kawai)

発表者は日本、米国、ドイツ、英国などの研究機関の所属する研究者から構成され、対象とするフィールドは南部アフリカの San、中部アフリカの BaYaka や Baka、南アメリカの Yaghan、マレーシアの Batek と様々な大陸に渡っている。バックグラウンドとなる研究分野も人類学、民族考古学、保健学などと多様で、パネルの主旨に沿った活発な議論が行われた。このパネルの発表に基づいて、学術雑誌の特集号への論文の投稿を検討中である。

また、会場ではポスター発表のスペースも設けられ、研究する分野や地域の壁を乗り越えるような熱気のある議論が交わされた（写真2）。さらに会期中には、野外の特設会場ですばらしい懇親会が催された。この懇親会では、アイルランドの伝統と創作を融合させた各種の美しく美味しい料理が提供され、世界の様々な地域から訪れた参加者たちの評判も上々であった（写真3）。



写真2 ポスター会場の様子. 発表をしているのは ASAFAS 院生の杉山由里子さん.



写真3 野外の特設会場で催された懇親会の様子. ブタの丸焼きが圧巻.

ダブリンの市内は美しい町並みと印象的であった（写真 4）。ただ残念なことに、この会期中に Covid-19 に感染した参加者もあった。依然としてマスクが室内と野外を問わず必須の日本とは異なり、ダブリンでは学会会場でも市中でもマスク着用者が数えるほどしかないことに驚いたが、コロナウイルス自体はかなりの密度で存在していたようであった。感染症対策についても考えさせられる催しであった。

次回の CHAGS14 は、3 年後に米国で開催されるそうである。パネルの参加者や同行した ASAFAS の院生らと、これからも一層研究活動に励んで再びこの祝祭的なイベントに参加して研究発表を行うことを誓った。

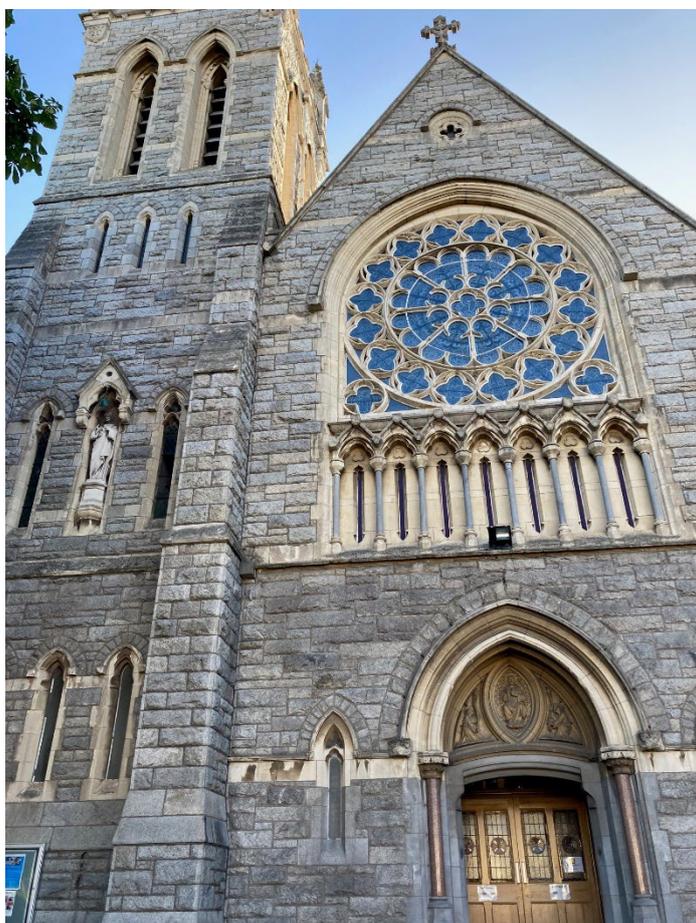


写真 4 ダブリン市内中心部にあり、アイルランド最古の国立大学としても有名なトリニティカレッジの一角。